

留学報告書 ～10か月の経験のすべて～

ノースセントラル大学
外国語学部生（長期）

10 か月間の交換留学は、過ぎてみると一瞬で自分自身を、自国を、そして生き方を見つめ直す貴重な機会となった。しかし、同時に後悔も残る期間だった。

昨年の8月、名古屋学院での春学期を終了後程なくしてアメリカ合衆国、イリノイ州に渡り派遣先大学であるノースセントラル大学での生活が始まった。初めて踏み入れる異国の地に、初めての1人で行く海外、知らない人だらけの環境に寮での共同生活、そして異なる言語や文化にうまく馴染めるのかなどと多くの不安を抱えながら、空港からキャンパスへの車に乗っていったことをつい先日のように思い出す。見るものすべてが新鮮に映り夢を見ているような気分だった。キャンパスに到着した次の日には1週間のオリエンテーションウィークが始まり、目まぐるしく予定に参加した。友人をつくることや、歩く道や見る景色の一つ一つを写真に収めることに一生懸命になりながら、本当に留学生活が始まったのだと実感する不思議な気持ちだった。

1学期目は4つの授業を、2学期目は3つの授業を履修した。履修登録の時点で先輩方の残した留学関係の資料から 興味の被る授業を選び、現地生と一緒に取る環境科学、東アジア史、ライティングと、留学生と取るプレゼンテーションのクラスを履修した。2学期目はより楽しめるようにと授業数を減らし人類学、スペイン語、リーディングの授業を履修した。

日本の大学より出される課題の量が多く、日本式の週に1回の授業でなく2、3回ある授業と授業外での取り組みで、単純に特定の学問に費やす時間と密度が高い分、アカデミックな学びを得るといってこのスタイルは優れていると感じた。具体的な課題には、教科書のリーディングやフィールドワーク、プレゼンテーション等がどんなクラスでも必須だった。以前に留学されていた先輩方の体験談を拝見して、ある程度厳しい生活への心構えをして行っていた分、そこまで大きく驚くこともなかった。

教授の中には、話すスピードの速い人や、専門用語を多用する授業もあったので戸惑うことはあったが、何とかついていくことができた。留学生が多い大学でもあるので理解のある教授も多く、直接教授に掛け合ってみることが授業を受ける上でのカギを握っていると思う。どんな教授も、分からないことはオフィスアワーで聞きにおいでとガイドしてくださったり、zoon や大学のウェブサイト上のミーティング機能を使用して時間を取ってくださったり、メールでのアドバイスだったり柔軟に対応してくださった。

ただ、2学期目で履修した人類学の授業は、週に3回の授業で毎回1章分のリーディング課題が出され、授業前にその内容の小テストを受けるようになっていたので、ノートを取りながら少なくとも30ページ程を読みこなすのに想像以上に時間がかかり、1クラス分多かった前の学期ともあまり変わらない生活だった。

授業内容や教授によって組み方や取る数を決めることが大切だと学んだ。渡航前は右も左も分からず、とにかく取りやすそうで少しの予備知識がある授業を積極的に選ぼうとしてしたが、今となってはさらに興味関心に沿った授業選びの方がよかったと思う。きっと授業や課題への向き合い方も違えば、友人関係の広がり方も変わってくると思う。

生活面に関してはもちろん寮生活等を初め、新しいことばかりだった。まず、基本的に食事は食堂でとっていた。これが学生に大変評判の悪い食堂だったが、たまにはぼぼ味のしない、柔らかくなり過ぎたパスタが出るくらいで、まだ耐えられるレベルだった。周囲からは悪いことばかり聞いていたが、私自身はそこまで不満もなく、食へのこだわりが人より少なく得したなと思いつつ日々活用していた。

朝は決まって学内のカフェでコーヒーを、学生証に入っているお金で購入するのが1日の中で1番幸せな瞬間だった。8時の授業に向かう学生用に朝は7時15分から開いてい

るのだが、混む時間は避けたかったので8時過ぎに毎回カフェラテを頼むのがルーティン化していた。そのうち店員のおばさんにも覚えられ、オーダーしなくともカフェラテでしょと、カフェに入るとすぐに作り始めてくれたり、空いている日は軽い話をしたり、そんな時間もまた、忙しく過ごす平日のほんのひと時の癒しだった。

また、寮に住むメリットとして、ジムを使用できるのは大きかった。インターナショナル生は特に仲が良かったので、夜になるとバスケットボールやバレーボールをして遊んだり、機械を使って一人で運動したりとほぼ毎日のように使用していた。そこで授業外にも人脈を広げられたり、また、プライベートな時間が少ない生活にも一人で過ごしたり、ストレス発散など運動のメリットを得られたりと、生活のバランスを保つのに大いに役立ったと思う。

そしてトイレやシャワー室はやはり日本のスタイルとは大きく異なり、私も渡航前から少し気にしていた部分だった。しかし、案外と慣れてみればそこまで不満はなかった。同じ階に私を含め4人ほど日本人がいたが、毎日シャワーを浴びるのはその日本人ぐらいで、3つのシャワー室が混むこともなく、平日は毎朝清掃が入るので、衛生面もそこまで気にならなかった。しかし、トイレは共用で個人の部屋の外にあるのだが、衛生観念の違いなのか裸足でトイレを使用したり、カバンを床にそのまま置いたり、かなりショックを受ける光景も目にした。

部屋は2人部屋で、ガーナ人のゲイラという同い年のルームメイトと住んでいた。彼女もインターナショナル生だったこともあり、居心地がよかった。バイトをいくつも掛け持ちし、朝から夜まで忙しくしていたし、Netflixが大好きで空いた時間はそればかり見ていたので、インドアなもの同士、部屋でお互いのことをしながら干渉せず過ごすことも多かった。大変綺麗好きで、よくあるルームメイトとのトラブルなども一切なかった。思い返すと留学中に会った人々には、大変恵まれていたとしみじみ感謝の念が溢れてくる。

2学期間の留学の後には、3週間のインターンシップをニューヨークで行う機会があった。この体験は、本当に貴重で次回からの長期留学内定者にもお勧めしたい。

私は週刊NY生活というニューヨーク在住の日本人に向けた週刊新聞を発行している会社だった。週刊新聞のため1週間の大まかな仕事の流れがほぼ決まっており、期限を意識しながらの忙しい会社に受け入れていただいた。社長の三浦さんを初め、社員の方々も大変に温かく迎えて下さり、初日から想像以上に様々な過程に携わらせていただいた。

記事の収集から、翻訳、編集や校閲、印刷そして配達まですべてを1つの会社で行い、その新聞を無料で配布していたのは大変驚きだった。ニューヨークに根差し、多くの人に読まれる新聞で、やりがいや、この仕事の魅力を存分に感じられる体験をさせていただけた。

オフィスがタイムズスクエアから徒歩4分の中心街に位置していたこともあり、通勤等も人ごみにもまれて都会を感じた。ニューヨークの街は、なぜあんなにも人が集まるのかなどという疑問が一切なくなるほどに、言葉にできない独特の惹きつける何かを感じる場所だった。街中にある落書きも、すれ違う多様で個性的な人々も、夜のビル街やキラキラしたタイムズスクエアの景色もすべてニューヨークでしか見られない特別なものようだった。

ニューヨークは移民に寛容な分様々な人種や異国から来た人々も住んでいる。ちょうどインターンシップの期間中は、黒人のホームレスが海兵隊出身者に殺害される事件とタイトル42という移民制限の権限が解除されるタイミングが重なっていたときだった。そのような移民やホームレスに関する記事を扱う中で街に出ると、コインの入ったカップを鳴らしながらお金をねだる人、小さい子を抱えながら電車の中でお菓子を売る若い女性たち、楽器の演奏をしながらチップを集める人、身体の傷をさらしながらお金を集める人、方法はさまざまであったが日に日に物価や土地の価格が高騰し続けるニューヨークで、その日を生きるのに必死な人々がたくさんいた。

ある日、収監された犯罪者の70%が小学校4年生レベルの読み書きができないという記事を目にした。時を同じくして、インターンシップ先の方から、アジア人や中国人ヘイトが横行したのは、トランプ前大統領のコロナウイルスを中国ウイルスと呼んだことが背景にあ

るのだという話を伺った。その日改めて、日本の教育制度がいかに意味を成しているのか実感した。読み書きができなければ、信ぴょう性のある新聞や本から情報を得ることも、どこかに働く当てを探すこともできず、人づてに聞く限られた情報の世界で生きていくことになる。これまで生活してきた日本では、なぜ勉強するのか、勉強するこの内容が将来必要なのだろうかなどと、疑問を抱き自分なりに模索しながらパッとしない答えで自己解決してきた。しかし、今このような2国間の異なる現状や社会のシステムを知り、教育とは未来を保証するものなのだという答えに行きついた。もし、中高生だった自分に伝えられたらどんなに良かっただろう。教育を通じて知識や能力を身に付けることが武器となり、将来生きていくうえでの保障となるということはこのインターンシップ期間を通して学んだ。日本人に生まれ、日本で育った以上、ほとんどの人がどこかで働き口を見つけることができる社会、それだけでも素晴らしく、ありがたいものなのだと実感した。

初めに書いたように、私の留学期間には、1つの後悔がある。それは、思うようにスピーキング力が上がらなかったことだ。もし、毎日存分に英語を話し1年過ごして得た結果ならば、このような後悔はしなかったと思う。

派遣先大学のノースセントラル大学には5、6人の日本人留学生のほかに、ノースセントラル大学の学部生として30人近く日本人がいた。もちろんインターナショナル生や現地生の友人らと話すときは英語を使うし、リーディングやライティングに関しては、課題でたくさん機会が与えられる分、多少の成長を感じられたこともあった。しかし、日本人の留学生の優しい気づかいにも、断れない自分の性格にも日々、これでいいのかと焦る気持ちが無くならなかった。日本語を聞かない日はほとんどなかったし、どんなクラスをとっても必ず1人は日本人学生と被っていた。もちろん素敵な友人ばかりであったし、感謝が尽きない。

ただ、日本人の交換留学生の中には、あえて日本人の関わりを少なくして、インターナショナル生らと積極的に過ごす人もいた。現に、周囲にそのような努力をして、環境を変えようとしている人がいる分、一概に、日本語を使わないことが無理だとも言えないこともまた、私にとっては葛藤だった。確かに、4年間留学をする学生らには、英語力を伸ばすことと、日本人のコミュニティを大事にすることの両立が難しくないのかもしれない。しかし、1年と期間の限られた留学生生活をより有意義にするのであれば、より多くのバックグラウンド持つ人々との交流に時間を割くことを優先してもよかったのではないかと後悔が残ってしまった。

ところが帰国した今、この後悔が原動力に変わっていることに気が付いた。きっとこの後悔は、帰国後天狗になって、中途半端な英語力に満足などすることなく、努力を続けるように自分を奮い立たせる材料だったのだと解釈している。もちろん、後悔することのないよう存分に、やれることをやりつくして帰国する方が良いとは思う。しかし、よく目にするキラキラした留学体験談の裏には、少なからずこういった一見負の学びも得られると思う。だからこそ、この報告書が同じような後悔をしないための心構えや、同じような状況にある人の励ましにでもなればと思う。

最後に、もし今後留学を希望しこの資料を読んでいる人がいるのであれば、留学にはたくさんの期待をもって向かってほしいと思う。期間中の壁はどんな人にもきっとやってくる。どんな行事も出来事も1回きりだと心にとめて、少しでも後悔のないよう殻を破って挑戦してみしてほしい。